

図書紹介

秋定嘉和

『近代と被差別部落』

渡辺俊雄

一、
周知の通り、秋定嘉和氏は、これまでも数多くの「論争的」な論文を発表されるときともに、『部落問題・水平運動資料集成』などのように基礎的な史料集の編纂も数多く手掛けてこられた。また同氏が編集に関わられた論集も数多い。

その反面、みずからの著作の出版に関しては、きわめて禁欲的でさえある。本書の著者紹介を読んでも、これまでにものになされたのは、昨年発刊された『近代日本人権の歴史』ただ一冊である。

その意味で、これまでに発表された諸論文をこうしてまとめられ、ひとつの「秋定理論」として体系的に読み解けるように

なったことを、まず感謝したい。

秋定氏は、私たち部落解放研究所の歴史関係の例会に欠かすことなく出席していただいていて、その場で出される鋭い質問は、いつも本質的であり、報告者を恐れさせる。幅広い学識には敬服させられるし、私のような底が浅くてしかも問口の狭い人間にはどれほど日本史研究の動向を知る良い機会になるかわからない。

また「軽口」にまぶしながら巨体から打ち出されてくる吹き矢のように鋭い発言は、参加者の学問的な関心を痛く刺激してやまない。はたして、私たちは秋定氏の問題提起をこれまででどれだけ受け止め、答えできたか、正直に言えば恥かしい限りである。

年も以前から一貫して主張されてきたことに、改めて驚かされる。

こうした主張は、実はより大きな問題意識を裏に秘めている。すなわち、社会経済史の面で言えば、なによりも部落と部落をめぐる社会の変化をよりの確に見すえていくこうとする。たとえば戦後、とくにいわゆる「高度経済成長」前後の部落の変化、そこから提起されている諸問題についての強い関心である。また部落問題の解決における行政・教育が果たしてきた（そして今後に果たし得る）可能性についてである。

運動史で言えば、様々な潮流を幅広く評価する複数主義の立場に立ち、それぞれの問題点を狭い枠に囚われずに評価していくこうとする。戦前の水平運動にあったポル派・アナ派・社民派あるいは無党派・国家主義など、それぞれの運動を研究の視野に入れること、水平運動ばかりではなく融和運動についても天皇制型・立身出世型（個人的解決）・集団的解決など、さまざまな流れに着目し、その功罪を検証しようとする。

三、

秋定氏の立論を融和主義と評する向きもあるようだが、私の見るところは必ずしもそうではなく、むしろ「融和主義でもかまわない」主義とでも言うべきか。

その上で秋定氏は、どのような主義・主張であれ、不正・腐敗を絶対に許さないこと、セクト主義に反対すること、この二点に対しては極めて厳格である。

私自身は部落問題の解決を民主主義的な課題（ただし反国家独占の民主主義の課題）と考えてきたし、その限りで実践的には秋定氏とあまり大きな開きはないつもりである。加えて今日のペレストロイカの時代に「人類的課題」を優先するという発想は、ますます秋定氏との距離を縮めているように思う。

いずれにしても、部落問題の解決を民主主義の課題と位置づけ、部落解放の取り組みを可能な限り幅広く評価し、今後の解放運動に対しても多様な可能性を追求することを求める筆者の、部落問題解決への真剣な思いが本書からは伝わってくる。

「なんと感度の鈍い奴よ」といらだち、あるいはお怒りであろうと察するが、それにもかかわらず、あるいは半ば呆れながら、よくぞ今日まであきらめずにお付き合ひいただいていると、お礼を申し上げたい。

二、

本書は、一九六七年から一九九二年の間に発表された一七の論文から構成されている。

全体は、次の五章からなる。

- 一、近代部落史の見直し
- 二、近代の被差別部落と資本主義
- 三、融和主義の展開
- 四、水平社運動の成立と転回
- 五、部落史周辺

秋定氏の基本的な主張は、一章によく現われている。部落問題の解決の可能性を、階級的解放（あるいは革命的解決）だけに求める従来主流であった歴史観の枠を広げ、民主主義的あるいは自由主義的解決とその可能性の意味を考えようという主張である。これは、今日でこそ大方の同意を得られるものと思うが、秋定氏はすでに二五

四、

秋定氏が放つ光は、水平運動だけではなく私たちが見過ごしてきた多くの問題にも放たれる。二章以下は、こうした観点からそれぞれの問題について言及した各論的な論文が集められている。

例えば、部落史の研究に言えば、戦前の喜田貞吉や柳田国男、折口信夫、堀一郎、菊池山哉、塩谷孝太郎、阿部弘蔵、滝川政次郎などの成果を継承することで多量に豊かになるのではないかと、問題提起している。

また、今日大きな関心を持たれるようになってきている戦前の朝鮮における白丁（ベクチョン）の解放運動である衡平社（ヒョンピョンサ）運動、水平社・融和運動の戦争協力「転回」の問題などについても、すでに重要な視点を提起されていることを、本書は教えてくれる。

ある意味でもっとも秋定氏らしい持ち味が出てくるのが、第五章「部落史周辺」かもしれない。大衆文学のなかにおける差別というテーマ、多様な部落史の可能性、刑

吏の問題、葬礼の歴史などなど、部落問題とかかわって秋定氏の関心は日常の生活、身の回りにいくらでも広がり止まることを知らない。その鋭い視線は差別問題・人権問題との関連を見逃すことがない。

本書全編を読み通すのが難しければ、興味を持たれる部分から読み進まれることをお勧めする。そこから読者は、必ずこれまでもとは一味違った部落史・部落解放運動史像を見つけられるだろう。

秋定氏が放つ問題提起をどう受けとめ、

こなしていくか、私たちにとって実に大きな課題である。正直に告白すれば、秋定氏が放つ吹き矢の「毒」は、今じわじわと私の体内で効き始めている。

なお一二二頁、天満紡績のストライキが部落民の就労を拒否したことに端を発するとの説は、金子マーティン氏の研究などではほぼ否定されている。注釈がほしかったところである。

(解放出版社、一九九三年三月、A五判・

三六二頁、三六〇〇円)

秋定嘉和

近代と 被差別部落

秋定嘉和

●近代部落の歴史
●近代の部落問題と資本主義
●部落問題の展開
●部落問題の歴史と現在
●部落問題の展望

近代における部落問題の中の、水平運動史、融和運動史を日本資本主義との関連や民主主義の拡大という枠組みから根底的にとらえ直すという視点で論じた書。

- A 5判362頁
- 定価3,600円+税108円